

第22回教育委員会（臨）

開会日時 令和6年11月 1日（金） 午前 10時40分
閉会日時 午後 11時15分
開会場所 板橋第三中学校 体育館

出席者

教 育 長	長 沼 豊
委 員	高 野 佐紀子
委 員	青 木 義 男
委 員	野 田 義 博
委 員	善 本 久 子

出席事務局職員

事務局次長	林 栄 喜	地域教育力担当部長	雨 谷 周 治
教育総務課長事務取扱参事	諸 橋 達 昭	学 務 課 長	金 子 和 也
指導室長	富 田 和 己	新しい学校づくり課長	柏 田 真
学校配置調整担当課長	早 川 和 宏	施設整備担当副参事	彼 島 勲
生涯学習課長	太 田 弘 晃	地域教育力推進課長	高 木 翔 平
教育支援センター所長	石 野 良 恵	中央図書館長	松 崎 英 司

署名委員

教育長

委 員

【第一部】第22回教育委員会

午前 10時 40分 開会

教 育 長 皆様、おはようございます。

私は、7月から教育委員会教育長を務めております長沼豊と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

開会に先立ちまして、私から一言ご挨拶を申し上げます。

皆様には、日頃より、板橋区の教育行政にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

教育委員会は、教育長と教育委員4名で構成する合議制の執行機関で、月2回ほど定期的に会議を開催し、教育行政の運営に関する基本的な方針や重要な事項について、審議・決定しています。

今回は「身近な教育委員会」として、令和6年度2回目の会議を開催いたします。

それでは、委員の紹介をいたします。

高野教育長職務代理者でございます。

青木委員でございます。

野田委員でございます。

善本委員でございます。

本日は、4名の委員の出席を得ましたので、委員会は成立しております。

それでは、ただいまから、令和6年第22回の教育委員会を開催いたします。

本日の会議に出席する職員は、雨谷地域教育力担当部長、諸橋教育総務課長事務取扱参事、金子学務課長、富田指導室長、柏田新しい学校づくり課長、早川学校配置調整担当課長、彼島施設整備担当副参事、太田生涯学習課長、高木地域教育力推進課長、石野教育支援センター所長、松崎中央図書館長、以上、11名でございます。なお、林次長は公務のため、遅れての参加となります。ご了承ください。

本日の議事録署名委員は、会議規則第29条により、高野委員にお願いいたします。

また、本日は、多くの方に傍聴にお越しいただいておりますが、会議規則第30条により許可しましたので、お知らせいたします。

○報告事項

1. ルールメイキング～校則の話～

(板橋第三中学校)

教 育 長 本日の会議では、「ルールメイキング～校則の話～」を報告事項として、意見交換を行っていきたいと思います。

それでは、早速ですが、「ルールメイキング～校則の話～」について、板橋第三中学校、武田校長先生より報告をお願いします。

改めまして、皆様、おはようございます。

本日はご多用中にもかかわらず、身近な教育委員会にご参加くださいました地域、保護者の皆様に心より御礼申し上げます。どうもありがとうございます。

私は、本校校長の武田幸雄と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。では、この後は着座にて失礼いたします。

今回は「ルールメイキング～校則の話～」をテーマに熟議を行うため、本校が会場校になったのではないかと認識しております。

それというのも、今お手元にごございますポスターは、本校で令和2年から各教室に掲示されている校則のポスターです。

本校の校則は「Be Gentleman 紳士であれ」のたった一つです。

以前は、まさに微に入り細を穿つように定められていた校則をたった一つに変更した当時は、まだブラック校則とか、ルールメイキングなどという言葉は耳にしませんでした。

その変更から5年目を迎え、既に本校ではすっかりこの校則が定着しています。

私が着任した7年前のちょうど今頃、平成29年11月13日の朝礼で、当時の生徒に校則の話をしました。少しお時間を頂戴し、それを聞いていただくのが校則改訂の趣旨を端的にご理解いただけるものと考え、一部を読み上げさせていただきます。

私には、校長になって以来ひそかに抱いてきた夢があります。それは、いつか細かな生活の決まりや校則が一切ない学校を築きたい、という夢です。そう聞くと、もしかしたら「学校に校則がなければ自分の好きなことができる。ぜひそういう学校にしてください」と期待した人がいるかもしれません。誤解がないように、私の真意を分かりやすく説明しましょう。

「Boys, Be Ambitious」（少年よ大志を抱け）の言葉で知られるアメリカの教育者・クラーク博士は、1876年（明治9年）、開校したばかりの札幌農学校（現在の北海道大学）に、初代教頭として着任しました。その際、校舎内の廊下にたくさんの校則が貼られているのを見て、クラーク博士はこう言ったそうです。

「規則で人間をつくることはできない。この学校に、校則はたった一つあればいい」「それは、Be Gentlemanだ」。

Be Gentleman. 意味は「紳士であれ」。Gentleman（紳士）は男性を指す言葉ですが、これは札幌農学校が当時は男子校だったからで、皆さんは「男女に関係なく、知性に富み、礼儀正しく、思いやりにあふれる人」と解釈してください。

集団の構成員一人ひとりがGentleman、つまり、礼儀正しく、人の立場で物事を考えられ、善悪の判断を間違えることなく行動できるのであれば、その集団に細かな規則やルールは不要でしょう。私が皆さんに期待するのは、そうした自律の精神です。

「自ら律する」と書いて「自律」。周囲からの制約でなく、自分で確立した規範に従って行動できる、という意味です。「なんだ、そのような簡単なことか」

などと思わないでください。実は、とても難しいことなのです。

周囲からの制約、つまり校則がないからといって、一人ひとりが好きな時間に登校したり、学習の場にふさわしくない身だしなみをしてきたり、スマホを持ち込んで自由に使ったりしていたら、学校はどうなると思いますか。

ただ自分勝手な人間が集まり、各自やりたいことをやっているだけの無秩序な集団と化してしまうでしょう。現在多くの学校に校則がある理由の一つは、学校がそうならないようにするためでもあるのです。

全ての生徒が、自分の取るべき行動規範を、自分で決めることのできる学校。さらにその行動規範は、自分のこと以上に、他者の存在やあるべき集団の姿が優先されている学校。校則のない学校とは、そういう学校です。

言い換えれば「校則のない学校」とは「校則を必要としない生徒が通う学校」のことなのです。そして「校則を必要としない生徒」とは、「自律の精神が身に付いている生徒」ということになるでしょう。

Be Gentleman（紳士であれ）の一言で、全ての生徒が快適で秩序ある集団生活を送れるような学校を築きましょう。

Be Gentlemanの一言で、全ての生徒と先生とが信頼し合える学校を、ともに築いていきましょう。

以上、その日の講話原稿の一部をそのまま読み上げさせていただきました。写真は、講話を全文載せて同じ日に発行した「校長通信」です。タイトルに「校則無用」とあり、7年前の私がBe Gentlemanの紙を広げているのがお分かりいただけるかと思います。

先ほども申し上げたとおり、7年前に生徒に話したこの趣旨が、本校の校則改訂の原点です。

ただし、それを実現するまでに3年かかりました。その一番の理由が、あまりに当時の校則が細か過ぎたからです。

そのような当時の校則の一部を紹介します。

まず、身だしなみに関する校則の一部です。

男子の髪の毛は耳にかからない。

女子は髪の毛が肩にかかったらゴムで結ぶ。ゴムの色は黒か紺か茶色。

ブレザーの下防寒着は黒か紺の無地のセーター。教室を出るときはブレザーを着用する。手袋・マフラーは華美でないもの。コートの色は黒か紺。

次に、私生活に関するものです。

夕焼けチャイムまでには帰宅する。

子どもだけでボウリング場や映画館、繁華街には行かない。

夜間の外出は厳禁。

身だしなみについて、男子の髪の毛は耳にかからないと言っておきながら、横だけ刈り上げたツーブロックのような髪型にすると、不自然だから横に合わせて全体も短くしろと指導するのは不合理です。

女子のロングヘアに関しては、長い髪をゴムで束ねるのは、実験や実技等の際に危険を予防するのが目的であり、その際の髪ゴムの色が紺や黒でなければなら

ない必然性はありません。

防寒着や防寒グッズについて、気温や体感温度に合わせて上着や防寒着の適切な着脱を指導することは大切です。しかし、場所や色の指定まで細かく定める必要はあるのでしょうか。あわせて、華美の基準はどこにあるのでしょうか。

私生活に関するものについて、そもそも校則が生徒の私生活にまで踏み込んでいたこと自体、意味不明ですが、冬の夕焼けチャイムは夕方4時半には流れます。

ボウリング場や映画館、繁華街には行かないとは、不適切にもほどがある昭和の香り漂う表現です。

夜間の外出は厳禁といっても、夜間とは何時以降を指し、それを誰が取り閉まるのかは不明です。

といった細か過ぎて伝わらない校則の微修正が時間と労力の無駄と考えた私は、一度古い校則をスクラップにして、新しい校則をゼロから作った方がよいと考え、校則の一本化を先生方に提案しました。

予想どおり、先生方の反応は強い拒否反応が9割、残り1割は趣旨には賛同できるが不安がありました。総じて、学校が荒れてしまうことへの懸念が、その根底にはありました。

細かい経緯は割愛しますが、それでもと譲らない校長との妥協案として、教員だけでなく、生徒の意見も聞くことになりました。といっても、全校生徒の多数決で決めるわけにもいかないのです、学級委員や生徒会役員などを務めていた生徒を集め、私との意見交換会を開きました。

他の先生方はオブザーバーという形で臨席しつつ、私の言動に目を光らせていました。これも細かい経緯は省略しますが、そこでは主に当時の9年生がどちらかといえば一本化に反対、7・8年生がどちらかといえば賛成、校則を変えてみる価値はあるといった意見でした。9年生という既存の校則に慣らされてしまった最上級生が否定的な意見だったのが印象的でした。

それでも、古い校則を枝葉末節の変更ではなく、一度スクラップにしたことで、5年先、10年先、この先100年の時代の変化にも耐え得る校則になったと思っています。

校則を「Be Gentleman 紳士であれ」に変更して5年目。結果として、現在本校は荒れていません。それどころか、好きな色のヘアゴムをしてくたり、性別に関係なくロングヘアにしたり、寒い日に標準服の下にカーディガンを着てくたりする生徒を見て、私が着任した当時と比べ、随分健全な学校になったと思っています。

生徒たちも自分の通う学校の校則が「Be Gentleman」であることに誇りを持っているようです。

9年生の受験面接練習で、板三中のよさや特色を尋ねるとほとんどの生徒が校則を挙げます。行事のスローガンやクラス目標等でも、しばしば「東京で1番」というフレーズと並んで「Gentleman」という単語が引用されます。

区教委は今、年に一回の校則の見直しを各校に求めています。本校では見直しようがありません。その一方で、年に一回どころか、日常的に「その身だしな

みは紳士と言えるかどうか」「その振る舞いや言動は紳士と言えるかどうか」などを生徒に問いかけ、教員も一緒になって考える習慣がついています。

校則が一つしかない本校は、言うなれば毎日がルールメイキングではなく、ルールシンキング。日々、紳士とはどうあるべきかを考え続ける学校になっているのです。

ご清聴ありがとうございました。

教 育 長 校長先生、どうもありがとうございました。

武田校長先生の改革は、校則だけではなくて、土日の部活をやらないとか、学力向上策とか、色々な改革をしていただいていますので期待しております。ありがとうございます。

それでは、教育委員から所感を伺います。

では、まず高野委員、お願いします。

高 野 委 員 武田先生、ありがとうございました。板三中が一つのルールに絞った経緯が大変よく分かりました。そして、私は、先生が最後におっしゃった毎日がルールシンキングであるというところが、大変心に残っております。

今年、中学校の運動会ですとか、文化発表会に行ってまいりました。その中で、例年と比べて、運動会も生徒会や実行委員会、また文化発表会も実行委員が中心となって、かなり改革が進んでいるなという印象を受けました。生徒たちが自分たちで運動会や文化発表会がどういう在り方がいいのかということを考え、議論を尽くして、新しい形をつくり出しているのだなと感じました。

ルールメイキングだけではなくて、全てのことにに関して、今までどおりの当たり前を見直して、目的を深く考えて、どういう形にしていけば自分たちが求めている最上の形になるのかということを、常に生徒たちが自主的に考えているということを感じました。

板三中でも文化発表会があったと思いますが、校長先生の校長通信によれば、今までは学校で発表会をしていたが、5年前に当時の8年生4名が校長室を訪れて、東京で1番の合唱、演奏、ダンスを体育館ではなく、専用ホールで行いたいという思いを、校長先生に直談判に来たことから始まったそうです。

当時の8年生は自分たちのためにというよりも、自分たちが今、ここでこういう意見を出しても自分たちが文化会館でやることはできないが、自分たちの後輩に対しての行動を取ったんだと思います。

自分のためではなくて、学校がよりよくなるため、みんながよりよくなるために考えていく、そういう気持ちが板三中では育っているという印象を持ちました。

ルールだけではなくて、今あることを全て当たり前に受け止めずに何が必要なのかを考えていく日々、姿勢こそがルールメイキングを通して育ってほしい力だなと思います。

教 育 長 ありがとうございます。

それでは、青木委員、お願いいたします。

青 木 委 員

武田先生、大変貴重なご意見をありがとうございました。

私自身、今年の4月から東京の私立の学校の校長を仰せつかっております。

やはり、一番最初に感じたのは校則のことです。

私立学校といいますと、やはり制服や何かもきちんと決まっていることも含めて、区立の中学校よりかは、ともすれば厳しい校則というところもありました。私のいる、中学高校はまさにそのようなところの典型的なところでございました。

やはりそのような意味も含めて、生徒会の活性化ということが非常に重要だなということを強く感じて、まず生徒会の役員の人たちと話をしました。やはり、武田先生と全く同じ考え方で、「あなたたちが提案してくれないから学校がやはりルールメイキングをするしかないのではないか」という話をして、それでシンキングというところまで。あなたたちが、やはり生徒自身が校則の在り方、学校の在り方を考えてもらって、自分たちが自分たちの学校を誇りに思えるような学校にするためにはどうしたらいいのかというところをきっかけに、考え始めてもらったという。まだ1年目ですので、武田先生のように改革は全く進んでいません。ただ、こういうことを通じて、生徒会の役員たちが、自分たちがやはり狭い世界の中の見識しかなかったということを思い、実は他校との交流を持つようになってくれた。一つ、一步の進歩です。近隣の中学、高校、私立、公立を含めてですが、生徒会が出かけて行って、板橋は生徒会交流会というのをきちんとやっているわけですが、あれも非常にいいなというところがあって、私は今、私立の中でもそのようなことができるという改革を始めさせていただきました。

おかげさまで、特に意識の高い子たちがまず地域の方たちへの貢献を始めて、特に吹奏楽部が地域の警察、消防、このようなところの色々なイベントや何かにも積極的に出るようになっていただいた。やっぱり少しずつ変わってくるんだなというところで、この先、武田先生の板三中をめざして、校則がなくなるように私も努力したいなと強く感じたところです。

本当にどうもありがとうございました。

教 育 長

ありがとうございました。

それでは、野田委員、お願いいたします。

野 田 委 員

野田です。よろしくお願いいたします。

武田先生のお話を伺い、板橋第三中学校で取り組まれている「Be Gentleman」という校則について改めて考えさせられました。常に「何のために何が必要か」、そして「そのために何ができるか」を意識し、中学生の発達段階に応じて子どもたちの考え方がしっかりと尊重されているルールだと感じています。

私からは、最近興味深く感じたエピソードを紹介させていただきたく、メモを用意してまいりました。

夏休みに娘が教育委員会事務局指導室主催の「イッティングリッシュワールド2024」という企画に参加しました。この企画は基本的に英会話を通じて交流することを目的としたものでしたが、テーマが「自分たちが通う学校について考える」というもので、大変興味深い内容でした。私は直接その場に参加していませんが、帰宅後に娘や妻から話を聞き、写真を見せてもらう中で、その活動に感銘を受けました。

娘のグループは常盤台小学校、金沢小学校の児童5～6人のチームで、英語で「理想の学校」について話し合い、ポスターを作成して発表しました。そのポスターのタイトルは「自由な学校（フリーダムスクール）」で、非常に型破りな内容でした。具体的には、「毎日が休日」「学校に行かなくてもよい」「スマホの持ち込みは自由」「時間やルールに縛られない」というものでした。

また、行事として唯一提案されたのは「お誕生日会」で、1,000人もの生徒がいるため、ほぼ毎日誰かの誕生日を祝うことになり、それが学校全体の行事になるというものでした。遊園地のような楽しい学校をイメージした内容にも見えましたが、そこには彼らなりの深い考えが込められていました。

たとえば、唯一必須とされる体育の授業については「協調性やチームワークを高めるために必要」との考えが示されていました。また、教師は校長先生1人だけという設定でしたが、これは日頃から校長先生が子どもたちと対話し、寄り添っている姿勢への信頼と尊敬の表れだと感じました。彼らは時間やルールに縛られない自由で主体的な学びを重視し、生徒同士で学び合う環境を理想として掲げていました。

この活動を通して、私自身も校則の本質について考えるきっかけを得ました。校則とは、本当に必要なものなのか。児童・生徒が自らの学校生活をより良いものにするため、協働して出し合った意見を共有し、ひとつの目標に向かって進むためには必要な考え方なのではないかと感じました。

本日まで参加のみなさまにはぜひ、この後の協議でディスカッションしていただき、皆さまのご意見をお聞かせいただきたいと思います。そして、私たちの学校におけるルールメイキングについて、一緒に考えを深めていければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

教 育 長 ありがとうございました。

それでは、善本委員、お願いいたします。

善 本 委 員 武田校長先生、本当にありがとうございました。

先生の教育理念とされていらっしゃったことに、本当に私は強く心から共感いたしましたし、何よりもその理念が、1年間の学校経営を通じて、きちんと実践され、実現しているというところに深く感動いたしました。

今日、1時間校内を拝見させていただいて、何よりも生徒の皆さんが明るく気持ちよく挨拶ができますし、教室の中の授業規律がきちんと整っている。ですか

ら、先生が理念とされていることが、まさにちゃんと子どもたちの姿として実現できているというところが、本当にすばらしいなというふうに思いました。

私自身の経験を少しお話しいたしますと、私はずっと都立高校で教師をしておりまして、ちょうど先生がこちらにいらっしゃる少し前、今から8年前に都立の中高一貫校の校長になりまして、初めてそこで中学生を自分の生徒として見ることにになりました。

そこで、校則で男子のツーブロックは禁止だと言われて、私、聞いたのです。「ツーブロックって何が駄目なの」と。そうしたら、区立中学出身の中学の生活指導主任が「校長、中学ではツーブロックが駄目なのは常識ですよ」と言われて。そうか、私は常識がないんだというふうに思ったなんてことがありましたので、多分先生とすごく近いような感じだと思います。

それから、今、私はご案内のとおり、私立の中高一貫の女子高で校長をしていますので、まさにゴムの色が決まっていますのです。私は言いました。「ゴムの色よりも、全員がきちんと気持ちよく挨拶できることの方がずっと大事じゃない。人として。ゴムの色を決めるよりも大事なことがあるでしょう」ということを今言っていて、まさに校則の見直しということを行っています。

国レベルでも文科省が生徒指導提要进行を一昨年に改めて、校則の改訂ということを行っています。武田校長先生はまさにそれよりもずっと前にそのことを着手されていたということで、そういう意味で大変すばらしい教育実践をなさっていらっしゃるということに本当に感銘を受けましたし、また私も、同じ校長の立場としても励まされる思いであります。

その上で、一つの意見としてお聞きいただければ幸いなのですが、「Gentleman」という言葉は完全に男性しか示さない言葉です。クラーク博士の、むしろもう一つの有名な言葉、「Boys, Be ambitious」も、今では引用して活用するときには、「Boys and Girls Be ambitious」というふうに引用するのが一般的になっているかと思います。

ですから、そういう意味でその部分が、武田先生のすばらしい教育理念を表現するものとして、もし私が生徒であったならば、ある種の疎外感を味わってしまうなど。

例えば、これは「Be Gentle」であっても、先生の理念が表現できていたのではないだろうかというところを感じましたので、その部分はあえて申し上げたいなというふうに思います。

今、時代はもう少し進んで、性別を書くときにも男、女、それ以外ということもあるような時代になってきていますので、先生のすばらしい理念を表す表現が男性のみを表す言葉でなくあることがあれば、もしかしたらさらにすばらしいかなということを感じたということをお伝えさせていただきます。

本当にありがとうございました。

教 育 長 ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、本日の身近な教育委員会第一部を終了いたします。

す。

ありがとうございました。

休憩を5分挟みまして、第二部グループディスカッションを行います。よろしくをお願いいたします。

午前 11時 15分 閉会